

2015  
秀作

## 第48回「おかねの作文」コンクール



# 五百円から学んだこと

静岡県・富士市立須津中学校 3年 狩野 菜摘

私は、今、特に不自由なく生活をする事ができている。なぜなら、私が不自由することのない生活をおくることぐらいの「お金」があるからだ。お金があることで、私が生活することができることを実感することができたのは、最近のある体験からだった。

「はい、これでジュース買ってきな。」母は私にそう言って500円玉をわたした。しかし、私がその500円を自動販売機に入れようとしたとき、私の手から500円が落ちてころがり、そのまま下水道に落ちてしまった。私はしかたがないので、ジュースをあきらめて母のもとに戻ると、母は私をととても怒った。「菜摘は500円の大切さが分かってない。」と言われた。正直私はそのとき、「たしかに500円を落としたことはちゃんと気をつけなかった私が悪いけどそこまで怒ることないじゃんよ。」と思った。でも、たしかに私は500円というお金の大切さをよく分かっていなかったのかもしれない。私は、そのできごとがあったことで、自分で農業を営み、自分の家で育てた野菜を販売している祖母に「500円の大切さ」を聞いてみた。祖母は、「一日に500円も売れない日があるよ。」と言った。私はその言葉にととても驚いた。なぜなら、祖母は、一日中畑にいて汗をたくさんかいて、腰を痛めながら毎日がんばっているのに、500円もかせぐことのできない日があることに、損じゃないかと思ったからだ。「だから500円はととても大きくて、重くて、大切なものなんだよ。」私は、祖母の言葉を聞いて、私が500円を落としたときに、母があんなに怒った理由がよく分かった。そして、それと同時にとても申し訳ない気持ちになった。祖母の話聞いたことで、自分がなんとなく使っている500円玉には、さまざまな苦勞や、努力がたくさんつまっていることを知った。何より、それだけお金がととても大切なものだという事を知ることができた。

その経験から、私は自分なりに「お金を大切にするために心がけること」を

二つ決めた。一つ目は、「お金があると思わないこと」だ。私は今まで、買い物をするとき、自分のほしい物以外の余分なものをよけいに買ってしまふときがたくさんあった。それは、私が、「まだちゃんとお金があるから大丈夫」と思っているからだ。私は、祖母の話聞いて、一生懸命働いているのに、少ししかお金をかせぐことができない人たちがいることを知った。それなのに、私はお金を余分に使ってまで余分なものをかうことは、その人たちに対して失礼だし、自分にとっても「もったいない」と思った。だから、つねに「お金があるから大丈夫」と思わないことはとても大切だと思う。二つ目は、何より大切なことで、「お金をかせいでくれている人、仕事をしてくれている人に感謝すること」だ。私がこうして不自由なく暮らしているのは、お金をかせいでくれる親のおかげだということを、私の体験や、祖母の話からあらためて感じる事ができた。私は、今まで、親が仕事をしてくれていることを、当然のように感じて毎日を過ごしてきたけれど、お金の大切さを知って、普通の生活をつくってくれている親にとってもありがたさを感じる事ができた。だから、つねに感謝をするという気持ちを忘れずに生活をしていきたいと思う。また、そのようなことを考えさせてくれた祖母にも、感謝の気持ちとして、手伝いをしたいと思う。

私は500円を落としてしまったことで、お金の重み、かせぐことの大変さ、そしてお金の価値を知った。お金には、たくさんの努力と苦勞がつまっているということを実感した。私は、まだ正直、お金をかせぐことの大変さを経験したことがないから、お金について十分には分からない。だから、私は将来がんばって仕事について、お金を一生懸命かせいでみたいと思った。今回の件で考えた行動したりしたことを糧として働きたい。「500円を落としてしまつてごめんなさい。」あらためてそう思った。

